

「社会派作家・石川達三」の形成過程

——作品集刊行と評価の変遷——

下清水 久留美

はじめに

石川達三（一九〇五—一九八五）は、「蒼氓」^①で第一回芥川賞を受賞したこと、日中戦争下に「生きてゐる兵隊」^②を書いて筆禍を被ったこと、戦後には新聞小説の書き手として活躍したことなどで知られている作家である。一九三〇年頃のブラジル移民を題材とした「蒼氓」や、横浜事件を題材とした「風にそよぐ葦」、佐教組事件を題材とした「人間の壁」^④など、社会問題に焦点を当てた小説を多く書いた。一九六九年には「社会派文学への積年の努力」が評価され、菊池寛賞を受賞している。石川は一九六〇年代から「社会派作家」という枠組みで捉えられるようになったが、今日では、「社会派作家」という言葉は石川の代名詞としてすっかり定着している。

また、近年石川について書かれた文章の中において「社会派作家」という言葉は、社会、とりわけその中の権力者に対して抵抗や抗議をおこなった作家、という石川へのイメージと結び付けて用いられることが多い。

たとえば川上勉は、石川の作品が「现实生活のなかに隠れてい

る真実を描き出すこと」、「社会の諸悪に対する抗議の意志を表明すること」、「為政者の抑圧に対して国民を擁護する立場を打ち出すこと」といった特色を有していることが、「石川達三が社会派作家と呼ばれる所以」であると論じている。また、呉恵升は、川上の「五〇年を超える長年の文筆活動を通じて、（中略）社会や政治に対する抗議と怒りの意志を表明し、首尾一貫した主張を貫き通した」という石川への認識や、石川が死去した際の新聞記事の「石川達三さんは、現代社会の不正、腐敗、不公平に対して、庶民の立場から一貫して文学の場で戦ってきた」という言葉などを引用し、「現代では「抵抗作家」「社会派作家」など石川達三への肯定的な評価が主流を占めるようになっていく」とまとめている。^⑤

しかし、呉はこのような「社会派作家」、「抵抗作家」という石川への評価に懐疑を示す。呉はその研究で、今日の読者や研究者にほとんど忘れ去られていた石川の戦時中の作品、活動の存在を指摘し、石川が積極的に戦争協力を行っていた側面を明らかにしたうえで、次のように論じている。^⑥

石川達三は日本の中国侵略が本格化した日中戦争以降、多少

の戸惑いもあったが、全体的には「戦争」を推し進める日本政府や軍部と同調するような考えをもっており、(中略)戦時下において、「抵抗」や「社会への抗議」を行っていた作家であったという評価は決してできないのではないか、(中略)石川達三「社会派作家・抵抗作家」という評価の定着傾向は、これまで見てきたような戦時下における石川達三の「戦争協力」の文章を読まずに行われた、としか考えられない。

右のように呉は、戦時中の石川が積極的に国策宣伝に加担していた側面が顧みられないまま、石川達三「社会派作家」、「抵抗作家」という評価が今日定着していることを批判している。

今まで忘却されていた石川の作品や言説を踏まえて、改めて石川を評価するという作業は必要であろう。同時に、なぜそれらの作品や言説が忘れ去られたまま、今日の石川に対する評価が形成されてきたのかを検討する必要があるが、この点は未だ十分には検討されていないように思われる。

本稿では、積極的に戦争協力に加担していた側面が顧みられぬまま、石川「社会派作家」という評価が確立されてきた要因について、石川の生前に編まれた三つの作品集に着目して検討する。

一、三つの作品集

石川の生前には、以下に挙げる三つの大規模な作品集が編まれている。

・『石川達三選集』全一四巻(四、一二巻未刊) 八雲書店(一九四七)一九四九

・『石川達三作品集』全二二巻 新潮社(一九五八)

・『石川達三作品集』全二五巻 新潮社(一九七二)一九七四

それぞれの作品集に収められている作品は異なっており、八雲書店版には収められているが、新潮社版には収められていない作品や、逆に新潮社版には収められているが、八雲書店版には収められていない作品もある。一方で、一九五八年新潮社版『石川達三作品集』から一九七二年新潮社版『石川達三作品集』にかけては、収録作品数は増加するのみで、削られた作品は確認できない。また、いずれの作品集にも収められていない作品も存在する。

これらの作品集は三つとも石川の生前に編まれたものであり、編集者もしくは石川自身の意図のもと、収録作品が取捨選択されていると考えるのが自然である。石川の作品が網羅された全集が存在せず、収録作品が恣意的に取捨選択された作品集しか存在しないということは、石川の戦争協力的な作品や言説の忘却を促進した要因の一つといえるであろう。

以下では、三つの作品集への作品の収録状況を確認し、作品集の刊行が石川に対する評価の形成にどのように影響を与えたのかを考察する。また、本稿では石川の発表する小説の内容が軒並み戦時色の濃いものとなる太平洋戦争開戦以降、終戦までに発表された小説に絞って検討を行う。

呉の作成した作品リストによると、太平洋戦争が開戦した一九四一年二月以降、終戦まで石川が発表した小説は以下の十一作

品である。¹²⁾『新・石川達三論』に収録された、久保田正文作成の「石川達三年譜」に未記載のものはゴシック体で表した。¹³⁾

一九四一年二月～一九四二年
発表なし

一九四三年

・「誰の戦争か」『辻小説集』¹⁴⁾八絃社杉山書店 八月

・「大いなる朝」『週刊少国民』八月八日～九月二十六日

・「日常の戦ひ」『毎日新聞』八月三日～翌年一月二二日

・「帰れ故里へ 交換船を迎へて」『週刊朝日』十一月二二日

一九四四年

・「空襲奇談」『文学報国』一〇月二〇日

・「備へあれど憂ひあり」『週刊朝日』十一月二六日

・「慈善と慈悪 煙は煙に非ず」『週刊朝日』二月三日

一九四五年

・「地上の富」『週刊朝日』一月二二日

・「大空の五つ星」『週刊少国民』五月二七日～未完

・「成瀬南平の行状」『毎日新聞』七月一日～七月二八日

・「沈黙の島」『月刊毎日』八月

これら十一作品は、いずれも作品の舞台として戦時中という時局が強く意識されたものといえる。また、これらの作品は「誰の戦争か」を除き、いずれも単行本として刊行されたことは確認できない。さらに、これらの作品中、先に確認した作品集に収められているのは「空襲奇談」一篇のみである。また、「空襲奇談」

は一九七二年新潮社版『石川達三作品集』に初めて収録されており、八雲書店版『石川達三選集』および一九五九年新潮社版『石川達三作品集』には収録されていない。

もう一点特に注目すべきは、「地上の富」という作品である。

一九四五年に発表された「地上の富」は単行本化も、作品集への収録も確認できない。しかし、戦後の一九五三年一月一日より同名の「地上の富」という小説が、石川により『北海道新聞』はじめ、その他いくつかの地方紙で連載された。この二つの小説の内容は全く異なったものである。戦後に発表された「地上の富」は、一九五三年九月に新潮社から文庫本として刊行され、さらに一九七二年新潮社版『石川達三作品集』に収められている。

以下では、「空襲奇談」、「地上の富」の二つの小説に注目して、これらの作品が収録された／されなかった作品集の刊行が、石川の評価の形成にどのように影響を与えたのかを考察してゆく。

二、空襲奇談

「空襲奇談」は、「反枢軸側の某国」が発明した、無人で飛行する「新鋭爆撃機」をめぐる寓話である。無人で自動飛行する爆撃機が量産され、「枢軸側の艦船を次から次へと撃沈」し、「反枢軸国は近き将来の戦勝を期待して有頂天に」なる。すると、「人心は弛緩し、敵愾心は喪失され」、工員たちはシャンパンやビールを飲みながら爆撃機の組み立てを行い、司令官たちはご馳走を食べ、宴会をしながら爆撃機の帰還を待つようになる。そして、工員たちが「なま酔いの鼻歌まじりでいい加減な仕事をやったため

に「製造した爆撃機の大半は故障機となり、爆撃機は敵艦隊を爆撃することなく、反枢軸側の工場を爆撃してしまふ。以上が「空襲奇談」の梗概である。

このごく短い小説は、日本文学報国会の機関紙である『文学報国』（一九四四・一〇・二〇）に発表された。

久保田正文はこの小説を「作者の文明批評家的知性の發揮された作品」の一つとして数えている¹⁵。また、河原理子は「戦争のばからしさを、笑いに包んで示し、科学技術万能信仰に疑問を呈している」作品であるとの解釈を示している¹⁶。このように科学技術万能信仰への批判という解釈が存在する一方で、銃後の国民に向けての戦意高揚こそがこの作品の主題であるとする解釈も存在する。

呉恵升は「空襲奇談」と同時期に発表された石川の論説「制勝の鍵・総努力 各自の持場に隘路はないか」を参照し、当時の石川が「制勝」するためには一人一人各自の任務を完遂せよと呼びかけている¹⁷ことを確認する¹⁸。そのような文脈に照らして「空襲奇談」を読むと、「いい加減な仕事をしていた〈民衆〉側のミス（＝隘路）に警鐘をならし、批判の矢を向けている」小説と解釈することができ、「銃後の国民に向けて、各自の〈戦争協力〉を反省させようとする意図を持っていた小説」と考える方が当時の状況を考えて自然である¹⁹と論じる。

「空襲奇談」のテキストでは、具体的な数値がたびたび描写される。特に具体的な時間の描写は多く見られ、たとえば「三十秒」後の爆撃機の帰還を予期する科学者と、その「二十五秒」後に機影を現す爆撃機の様子や、新鋭爆撃機をもってすれば「二時間

内に大戦果があがるはず」が、「二時間二〇分」を經過しても一機だけしか帰還しない様子などが描かれている。

具体的な年月や分数などを描写することで、作中では時間経過が印象的に表されている。このような描写には、新鋭爆撃機の速さや、新鋭機導入によつて成果を得るまでの時間が短縮されたこと、自動化により飛行時間が高い精度でコントロール可能になったことなど、最新技術の恩恵を強調して読者に印象付ける働きがあると考えられる。しかし、物語の終盤では、故障した新鋭機により被る大損害が描かれることで、結局は最新の技術や、それをもたらす恩恵は否定される。

石川は戦中から戦後にかけて、一貫して交通機関が高速化してゆくことに対する懐疑を表明している。一九三九年に石川が発表した小説「交通機関に就いての私見」²⁰では以下のような記述がある。

交通機関の発達は人類に多大な幸福をもたらしたと諸君は考えるであろう。しからば僕は問う、その幸福とは如何なるものであるか、と。（中略）幸福も殖えたかも知れない。しかしより多くの不幸が殖えたのである。先ず考えて見るがい。交通事故というものは昔は無かったのである。（中略）丹那トンネルは人類の不幸の象徴である。数千万金を投じて、数十の人命を犠牲にし、数年の日子を費やして、丹那トンネルを切り開かなくてはならなかったことこそ、吾等現代人の悲劇である。得るところは何であったか。大阪まで一時間半ほど早く行けるといふことである。この一時間半が重大問題

であるとところに僕らの重大問題があるのだ。現代人は時間に追いつめられてしまった。

「交通機関に就いての私見」は石川本人の経験を基に書かれた作品であると思われるが、あくまで小説であり、語り手の思想を安易に石川本人の思想とみなすことは出来ない。しかし、石川は戦後に書かれたエッセイ「私の少数意見」²⁰においても、次のように交通機関の速力について懐疑を示している。

私がかねがね、交通機関の速力ということに疑問をもってゐる。欧米諸国へ半日か一日で行かれるというのは、明らかに便利には違いないが、一体文明人は究極のところどれだけの速さを要求するのか。ロンドンまで二日では足りないというのならば、一日でよろしいのか。半日を要求するのか。それとも一、二時間ではなくては困るといふのか。(中略) 会社は速力というものを唯一の魅力にして客を誘い、一方では客に多大の危険を負担させている。ちかごろ各地で起こっている航空事故の大量殺人は、すべて速力の犠牲であり、飛行機会社の自由競争の犠牲である。

これらの記述から、石川は速力を増していく交通機関にかなり否定的な考えを一貫して持っていたということがわかる。爆撃機は交通機関とは言えないかもしれないが、速力を備えている点、事故により人命に損害を与えるリスクがある点、速力の向上により移動や敵機爆撃などの成果がより短い時間で得られるようにな

るといふ点などで、両者は共通している。石川の交通機関の速力への批判は、「空襲奇談」の爆撃機にも向けられているように思われる。少なくとも、「空襲奇談」を科学技術万能信仰への批判の物語であると主張する読者は、ここで確認したような石川の文明への懐疑と、「空襲奇談」を結び付けて解釈しているといえるであろう。

久保田や河原はこのように、「空襲奇談」を科学技術や文明の進歩が破滅をもたらす物語として捉えた。一方、呉は弛緩した人心が破滅をもたらす物語として、この作品を捉えているということが出来る。

「空襲奇談」では、故障機が敵艦隊を爆撃せず、工場を全壊焼失させた責任について、「責任は司令官にはなかつたことが判明した。(中略) 工場の組立工員がなま酔いの鼻唄まじりでいい加減な仕事をやったために、計らずも大変な故障機を造っていたのである。」と述べられている。損害の原因は、新鋭機を開発した科学者ではなく、新鋭機の導入や運用の責任がある大統領や司令官でもなく、末端の組立工員にあると説明される。また、「爆撃で手足をもぎ取られてしまった工員たち」自身も「身から出た錆だ……」と小さな声でつぶやく。このように、末端の工員たちの責任が強調された記述に注目すると、弛緩した銃後の人々の気持ち破滅をもたらす物語と解釈することができる。

このように「空襲奇談」では、技術の高度化によつて新たに生じる危険性を顧みず、やみくもに新技術を導入することへの批判と、いい加減な労働を行い、戦争遂行に損害を与えてしまうような民衆への批判が二重に展開されているといえる。

「空襲奇談」は、科学技術万能信仰への批判という要素と、戦後の国民に向けての戦意高揚という要素の両方が含まれたテクストであり、どちらが正しい解釈かを検討することにはあまり意味がないように思われる。久保田のように、文明批評家たる石川の作品として「空襲奇談」を読むと科学技術万能信仰への批判という主題を見出す。一方呉のように、戦争協力者たる石川の作品として「空襲奇談」を読むと戦意高揚という主題を見出す。つまり、作品をどのような文脈において受容するかでその解釈は大きく異なる。

「空襲奇談」は、戦時中における石川の戦争協力的言説を、読者が濃厚に記憶しているうちには改めて公開されなかった。そして、戦後三〇年ほど経過し、石川に対する「社会派作家」としての評価が定着してきたタイミングで、「文明批評家的知性」を有した作者の作品の一つとして一九七二年新潮社版『石川達三作品集』に並べられた。

当初戦意高揚の目的のもと発表された「空襲奇談」は、一九七二年新潮社版『石川達三作品集』で初めて再公開されたことにより、文明批判の作品として読み替えられたのであった。

三、地上の富

『週刊朝日』一九四五年一月二一日号に発表された「地上の富」（以下『週刊朝日』版「地上の富」と呼ぶ。）には、「金持」で「けちんぼな」な山室と、「金よりも物」という考えから「何でもかんでも買ひ溜め」る荒井、「温厚で親切で人望のある」水野の

三人が登場する。あるときの空襲で三人の家は三軒とも燃えてしまふ。山室と荒井は日ごろの行いから家屋や生活のたて直しに窮するが、水野は日ごろ世話をしていた近所の人々に助けられ、「ほとんど失ふもの無しに、前よりも少し立派な歯科医院を僅か一箇月後に開くことができた」のだった。そして小説は以下のよう

に締めくくられる。

山室さんは金だといつた。荒井さんは金ではない、物だといつた。しかし金にしる物にしる、それらに執着するのはたゞ自分一個の幸福に執着することに他ならなかつた。天から降つて来る敵の爆弾は気まぐれだ。この爆弾に対しては、自分一人で自分の身を守り切れるものではなかつた。恰も天災が個人の力で防ぎきれないやうに、敵の爆弾を防ぐにも、時局の艱難を乗り切るにも、自分一個の力で出来るものではなかつたのだ。結局金でもなく、物でもなく、本当に頼りになるものは協力であり国民結束の力であつたのだ――。

以上が『週刊朝日』版「地上の富」の梗概である。

一方、戦後に発表された「地上の富」（以下戦後版「地上の富」と呼ぶ。）では、いわゆる朝鮮特需が起る中「平和産業か軍需生産か」で揺れる遠藤農機株式会社と、その社長である遠藤頼平一家の動揺が描かれている。頼平の娘である戦争未亡人の多恵子は、小学二年生の息子洋平と共に実家で暮らし、父親の会社で会計係として勤めている。多恵子は夫修太郎の戦死により婚家を追われ、盗みを働かなければ生きていけない状況を経験したこと

により、「この世間から馬鹿にされないように、立派に生きて行くためには、金がなくてはならない。金さえあればいいのだ」と金に執着し、頑なに貯金に励む女性として描かれる。

ある日、多恵子は軍隊で修太郎とかかわりのあった復員兵との会話を通し、「愛情のうすい」と思っていた夫からの深い愛情に気づく。さらに、復員兵の「物質じゃありません、愛です。いまのような混沌たる時代には、物質上の幸福などというものは、頼りにならないです。愛の力だけが、われわれの、この落ちぶれた魂と、生命とを支えてくれます。」という言葉をきっかけに、多恵子の金銭への執着は薄れてゆく。

戦後版「地上の富」は、『北海道新聞』に一九五三年一月一日から五月一六日にかけて連載された。また、その他いくつかの地方新聞においても連載されていた。物語には「昭和二十六―七年度階における日本の経済的・政治的状况」が反映されており、

「朝鮮戦争の不安定な収束段階における、日本の中小企業の戸惑いと混乱」が映し出されている²³。そして、そのような社会情勢のなかで生きる人間の幸福に焦点が当てられた作品といえるだろう。

これら二つの「地上の富」は、設定や話の筋が異なっており、全く別の小説である。しかし、題名と、根幹にあるテーマは共通しているといえる。石川は、戦後版「地上の富」の題名について「『地上の富』は言うまでもなく聖書（山上の垂訓²⁴）から取った題名である。（なんざら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と鏽とが損ひ、盗人うがちて盗むなり）」と述べている²⁵。この「財宝を地に積む」すなわち財産を貯えることを戒めるというテーマは、『週刊朝日』版「地上の富」からも読み取れる。石川は「山

上の垂訓」をモチーフに、全く同じ題名の小説を戦中と戦後の二度にわたり発表したということがいえる。

財産を貯えることが最も重要なのではない、ということとは両方の「地上の富」で述べられている。しかし、蓄財でなければ何が最も重要なのか、という結論については、二つの「地上の富」で異なっている。『週刊朝日』版「地上の富」では、「敵の爆弾を防ぐ」ため、また、「時局の艱難を乗り切る」ためには、「協力であり国民結束の力」こそが重要であると結論づけている。そして、「自分一個の幸福に執着すること」は咎められる。一方、戦後版「地上の富」では、個人的な「幸福」のためには、「愛」こそが重要であるということが読み取れる。

二つの「地上の富」は、題名やそのモチーフこそ共有しているものの、小説から読み取れるロジックには根本的な相違が存在する。

『週刊朝日』版「地上の富」は、異に指摘されるまで存在が埋もれていた作品の一つである。また、戦後版「地上の富」についても、管見の限りこの作品に言及した同時代評や先行研究は確認できない。一九七二年新潮社版『石川達三作品集』には、戦後版「地上の富」について久保田正文による解題が収録されているが、そこでは『週刊朝日』収録「地上の富」について一切触れられていない。

読者が二つの「地上の富」をどのように受け入れたのか、という点に関しては現段階では不明な点が多い。しかし、一九七二年新潮社版『石川達三作品集』や入手可能な単行本などを中心に、石川作品を受容する現代の読者にとって、石川達三の「地上の富」

といえ、それはすなわち戦後版「地上の富」を意味するのであるう。

以前に発表した小説と全く同じ題名、同じモチーフの作品を、全く別の小説として書き直すという行為からは、戦時中の作品の忘却という石川の願望が表れているように思われる。もし石川が『週刊朝日』収録の「地上の富」を自身の作品の一つとして受け入れていたのであれば、何の断りもなしに全く同じ題名的小説を上書きするというようなことは考えられないのではないだろうか。

おわりに

以上、本稿では太平洋戦争開戦から終戦までに発表された石川の小説について、作品集への収録状況に着目して考察を行った。

この期間に発表された戦時色の強い作品のほとんどが作品集に収められていないことは、それらの作品の忘却を促す要因となったといえる。

太平洋戦争中に発表された小説で唯一作品集に収録されている「空襲奇談」は、初出時には戦意高揚を目的とした作品として受け入れられた。しかし、一九七三年に「文明批評家的知性」を有した「社会派作家」の作品の一つとして作品集に並べられることで、科学技術批判の作品として読み替えられることとなった。

戦争協力を積極的に加担していた側面を覆い隠すために、編集者または石川自身が作品集の編纂をおこなったと決めつけるのは早計である。しかし、「地上の富」を上書きした石川の態度からは、戦争協力に加担した自身の作品が忘却されることを望む姿勢

が窺えるのではないだろうか。また、一九五一年頃の社会情勢が書き込まれた戦後版「地上の富」は、『週刊朝日』版のものとは比べると、より「社会派」的色合いが濃い作品であるといえる。

「社会派作家」として、文明や権力への抗議、抵抗を行う姿勢を押し出すほどに、一見それと矛盾する戦時中の国策に沿った内容の小説や言説は存在感を弱めていった。「社会派作家」として石川を売り出そうとする出版社の意図や、「社会派作家」たる石川の矜持が、その戦時中の作品や言説を忘却に向かわせたともいえるかもしれない。

【注】

- (1) 『星座』創刊号(一九三五・四)
- (2) 『中央公論』五三卷三号(一九三八・三)
- (3) 前編・『毎日新聞』(一九四九・四・一五)一九五一・三一・一〇〇)
- 後編・『毎日新聞』(一九五〇・七・一一)一九五一・三・一〇〇)
- (4) 『朝日新聞』(一九五七・八・二三)一九五九・四・一二
- (5) 「石川・大佛氏らに 菊池寛賞」『朝日新聞』朝刊(一九六九・一〇・一四)
- (6) 川上勉「はじめに」『石川達三昭和の時代の良識』萌書房(二〇一六) vii頁
- (7) 前掲6 viii頁
- (8) 「石川達三氏、反骨・信念貫いた生涯社会の不正に激しい怒り」『朝日新聞』夕刊(一九八五・一・三一)
- (9) 呉恵升「はじめに」『石川達三の文学―戦前から戦後へ、

「社会派作家」の軌跡』アーツアンドクラフツ(二〇一九)三頁

(10) 呉恵升「戦時下における「戦争協力」(二)——日本文学報国会を中心とした「文芸銃後運動」との関わりを軸に」『石川達三の文学——戦前から戦後へ、「社会派作家」の軌跡』アーツアンドクラフツ(二〇一九)一四六頁

(11) 前掲10 一一八〜一二九頁

(12) 呉の作品リストには「風樹」(『東京日日新聞』一九四一年九月一日〜二月一〇日)、「遺書」(『毎日新聞』一九四五年六月二五日用草稿)を含めた十三作品が期間中発表された小説として挙げられている。「風樹」は太平洋戦争開戦の三日後に連載が終了しているため、「遺書」は当時未発表であるため、ここでは除外する。

(13) 久保田正文「石川達三年譜」『新・石川達三論』永田書房(一九七九)二九一〜三六七頁

(14) 大政翼賛会が唱えた「建艦献金運動」の一環として、日本文学報国会が編んだアンソロジーであり、国民の戦意を高揚するような内容の作品が収められた。二〇七名の作家がそれぞれ原稿用紙一枚分の小説、檄文を寄せた。

(15) 久保田正文「解題」『石川達三作品集第二十三巻 若き日の倫理』新潮社(一九七三)五三二頁

(16) 河原理子「戦争と検閲 石川達三を読み直す」岩波新書(二〇一五)一九六頁

(17) 石川達三「制勝の鍵・総努力 各自の持場に隘路はないか」『週刊朝日』四六巻一五号(一九四四・一〇・八)

(18) 呉恵升「戦時下における「戦争協力」(二)——二つの「戦

場」、「微用」から敗戦まで」『石川達三の文学——戦前から戦後へ、「社会派作家」の軌跡』アーツアンドクラフツ(二〇一九)一七〇〜一七二頁

(19) 『改造』二二巻二二号(一九三九・一一)

(20) 石川達三「私の少数意見十九 速力の犠牲・その他」『文芸』六巻二号(一九六七・二)

(21) 久保田正文「解題」『石川達三作品集第一〇巻 四十八歳の抵抗 月報二十二』新潮社(一九七三)三六七〜三六八頁

(22) いわゆるマタイ伝の六章一九節である。「地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さびついたりするし、また、泥棒が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さびつくこともなく、また、泥棒が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」(『マタイオスによる福音』)

『新約聖書 共同訳』財団法人日本聖書協会(一九七八)二〇頁

(23) 石川達三「作中人物の系譜二十二」『石川達三作品集第一〇巻 四十八歳の抵抗 月報二十二』新潮社(一九七三)三頁

【附記】「空襲奇談」、「交通機関に就いての私見」、「私の少数意見」、戦後版「地上の富」の本文引用は一九七二年新潮社版『石川達三作品集』より、『週刊朝日』版「地上の富」の本文引用は『週刊朝日』一九四五年一月二一日号より行った。

(したしみず・くるみ

千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程二〇二四年修了)